

看護学生の高齢者虐待への認識（第1報）

—紙上事例を用いた横断的認識度調査—

古城 幸子*・木下 香織・馬本 智恵

看護学科

(2008年11月12日受理)

看護学科の1年から3年の学生を対象に、高齢者虐待に関する認識度を調査した。紙上事例を用いて、“認識する”“認識しない”“わからない”の三択で回答を得た。事例は、①身体的虐待、②世話の放任、③心理的情緒的虐待、④性的虐待、⑤経済的・物質的搾取、⑥自虐の6場面である。その結果、心理的情緒的虐待と経済的虐待の認識度は高く、その他の認識度は低いことがわかった。また、1年と2・3年の学生間に虐待の認識度が有意に低下するという結果となった。

高齢者虐待の予防や早期発見は、看護専門職者として高齢者の人権の尊重など倫理的な課題を日常的に敏感に捉えられ、ジレンマを感じられることが基本的な姿勢として必要となる。しかし、学年が上がるごとに虐待事例の判断に迷いが生じ、虐待不感の傾向が見られるという結果となった。今後は、実習体験の意味付けをさらに丁寧に行い、実習環境調整などへの指導上の課題が明らかになった。

(キーワード) 老年看護学, 教育方法, 映画教材, 高齢者理解

はじめに

「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者の支援等に関する法律」いわゆる高齢者虐待防止法が2006年（平成18年）4月に施行されて、丸3年を経過しようとしている。高齢者虐待に関する研究の動向は、1995年～2000年までを上村ら¹⁾が、また1996年～2006年について郷ら²⁾が分析している。介護保険制度導入前では、高齢者虐待の定義や考え方を示す総説と実態把握のための調査研究が多く、その後も、実態調査で、発生頻度、種類、発生要因、養護者の認識などについて分析報告がなされてきた。高齢者虐待に関する研究報告は、虐待を受ける高齢者やその養護者、関連機関の専門職を対象とした報告^{3) 4) 5) 6) 7)}は見られたものの、一般人や学生を調査対象とした報告は筆者の検索では2件のみであった。大西ら⁸⁾の社会学部学生と保健師養成専攻科学生を対象にした調査と、桂⁹⁾の看護学部学生と非医療系学生を対象にした調査である。

今回、高齢者虐待の認識度調査を看護学生対象に実施することになった背景は、筆者らの継続している看護ジレンマに関する研究テーマと強い関連がある。学生が実習中に体験する看護ジレンマは85%が「医療・看護体制に関するもの」で、高齢者に対するケア場面でのスタッフの言動やケアシステムに対する違和感をもっとも多いという結果¹⁰⁾となった。そのため、教育的な課題として、基本的な倫理的な感受性の育成と、ジレンマを解決して

いくための対処行動への指導の重要性が示唆された。

ジレンマの感受性と同様に、高齢者虐待の予防や早期発見は、専門職者として高齢者の人権の尊重など倫理的な課題を日常的に敏感に捉えられ、ジレンマを感じることが基本的な姿勢として必要となる。今回の高齢者虐待を示す紙上事例を使用して、看護学生を学年ごとに調査した結果、学年が上がるごとに虐待事例の判断に迷いが生じ、虐待不感の傾向が見られるという結果となった。実習体験の意味付けと実習環境調整などへの指導上の課題が明らかになった。

I 研究目的

紙上事例での高齢者虐待における看護学生の認識度を調査し、老年看護学に関する教育上の課題を明らかにする。

II 研究方法

1. 研究対象

2007年度のA短期大学看護学科学生1～3年。回答を得たのは、1年62名、2年64名、3年22名の計148名（回収率80.0%）である。

2. 調査時期

老年看護学Ⅰ（1年次後期）・Ⅱ（2年次後期）および実習（3年次後期）の終了時。学生は各学年に履修した専

*連絡先：古城幸子 看護学科 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

門科目の中で倫理や虐待に関する知識を段階的に得ている。

3. 調査方法

西元ら¹¹⁾作成による6場面の紙上事例を、作成者の了解を得て用いた。事例は、①身体的虐待、②世話の放任、③心理的情緒的虐待、④性的虐待、⑤経済的・物質的搾取、⑥自虐の内容である。各事例に「この場面を虐待と思うか」と質問し、「認識する」「認識しない」「わからない」の三択で回答を得た。実施方法は調査用紙を対象者に配布し、後日回収箱への投函にて回収した。

4. 分析方法

分散分析およびMann-Whitney検定を行なった。

5. 倫理的配慮

調査は無記名で任意とし、研究の目的、匿名性の保持、研究協力の有無で成績評価等の不利益の無いことを説明し、回収により同意を得たと解釈した。さらに、単純集計後、各学年に結果を示し、そのデータの意味を考える機会をもった。

Ⅲ 用語の定義

「高齢者虐待」については、高齢者虐待防止法（2006年制定）¹²⁾に規定されているように、家族・親族などの「養護者による虐待」と「養介護施設従事者による虐待」大きく2つに分けられる。その虐待行為は共通して以下の5つと定義されている。

- イ 高齢者の身体に外傷が生じ、又は生じるおそれのある暴行を加えること。
- ロ 高齢者を衰弱させるような著しい減食又は長時間の放置その他の高齢者を養護すべき職務上の義務を著しく怠ること。
- ハ 高齢者に対する著しい暴言又は著しく拒絶的な対応その他の高齢者に著しい心理的外傷を与える言動を行うこと。
- ニ 高齢者にわいせつな行為をすること又は高齢者をしてわいせつな行為をさせること。
- ホ 高齢者の財産を不当に処分することその他当該高齢者から不当に財産上の利益を得ること。

今回の調査では、上記5つに加えて「自己放任または自虐」を虐待行為の定義に入れた。

Ⅳ 結果

1. 属性からみた高齢者虐待体験

1) 今までの生活の中での体験（表1）

学生の背景は、1年生から3年生までの全体でみると、今までの生活の中での高齢者虐待の体験は、“虐待行為を行ったことがある”4名（2.7%），“虐待行為を見たことがある”が10名（6.8%），“虐待に関する場面は行ったことも見たこともない”が117名（79.1%），“分からない”

表1 今までの生活の中での虐待体験

	1年生	2年生	3年生	計	(%)
虐待行為を行なった	2	0	2	4	2.7%
虐待行為を見た	5	3	2	10	6.8%
ない	48	58	13	117	79.1%
分からない	7	5	5	17	11.5%
計	62	64	22	148	100%

が17名（11.5%）と回答した。

どのような場面かの自由記載では、“虐待行為を行ったことがある”では、「曾祖母が話しかけていたのに、うるさいと言った」「認知症の祖母の話聞き流す、無視する」といった心理的虐待や、「家庭内でのストレスを祖母にぶつけた。暴言を吐いたり、時には手を出した」といった身体的虐待であった。

“虐待行為を見たことがある”では、「寝たきりの祖父に祖母がきつい言葉を浴びせていた」「父が脳梗塞で我がままになった祖母をたたいた」という家族間の虐待目撃体験と、「昼夜問わず鳴らす患者のナースコールを届かない位置に置いていた」「ずっと泣いている施設利用者に向かって、早く泣きやまないとご飯あげないよ。たたくよ。という発言をしていた」「何度もトイレを訴える認知症の利用者を無視していた」などの病院や施設での職員による虐待を目撃していた。

2) 看護学実習の中での体験（表2）

表2 実習の中での虐待体験

	1年生	2年生	3年生	計	(%)
虐待行為を行なった	0	0	0	0	0%
虐待行為を見た	2	1	3	6	4.1%
ない	51	55	15	121	81.8%
分からない	9	8	4	21	14.2%
計	62	64	22	148	100%

看護学実習の中で虐待場面の体験では、“虐待行為を行ったことがある”0名（0%），“虐待行為を見たことがある”が6名（4.1%），“虐待に関する場面は行ったことも見たこともない”が121名（81.8%），“分からない”が21名（14.2%）と回答した。

どのような場面かの自由記載では、“虐待行為を見たことがある”で、「ベッドの4本柵や、車椅子使用時もテーブルを設置し紐を結んでいた」や異性の入浴介助場面について回答していた。自由記載で多かったのが、“分からない”と回答した学生で、21名中7名がコメントを記載し、「ミトンをはめてチューブを抜かないようにしていた。本人はとても嫌がっていた」という抑制に関する虐待が

多く記述されていた。また、高齢者の人権の尊重にかかわる内容では、「レクへの参加をしたくない方にレクへの参加を促した」「車椅子の後ろのポケットからおしめがいつも見えていた」「家族の食事介助で、食べないと死ぬとか管を入れるようになるから食べなさいと、強要していた」「認知症の人の背中にハエが止まっていて、ハエたたきで叩いていた」などの場面を目撃していた。

2. 紙上事例に対する学生の虐待認識

紙上事例は、①身体的虐待、②世話の放任、③心理的虐待、④性的虐待、⑤経済的虐待、⑥自己放任・自虐に関する6事例で、それらに対して、“虐待行為と認識する”“虐待行為と認識しない”“わからない”3つの選択肢で回答を得た。

6場面についての認識度の調査結果は、3学年全体では、図1のように事例によって認識度が大きく異なった。“認識する”が半数を超えたのは、③心理的虐待127名(85.8%)、⑤経済的搾取94名(63.5%)で、“認識しない”が半数を越えたのが、①身体的虐待106名(71.6%)、⑥自虐93名(62.8%)であった。“分からない”が半数を超えたのが、②世話の放任76名(51.4%)、④性的虐待81名(54.7%)であった。

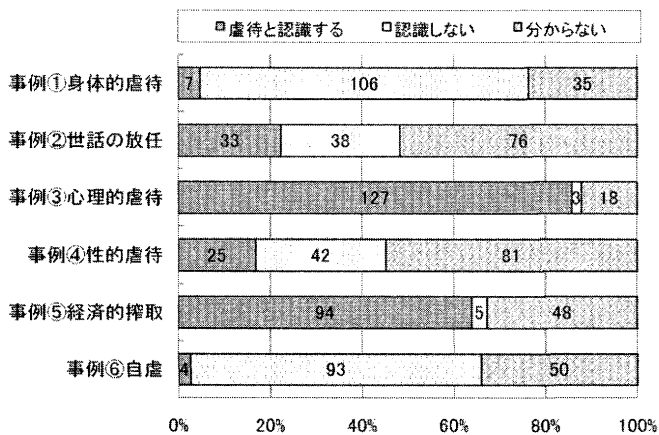


図1 各事例の認識度 (n=148)

1) 身体的虐待事例

事例1：利用者が車椅子で座っていると前のめりになってすり落ちてしまうため、車椅子での移動時は転落防止のために、安全ベルトで車椅子と利用者を固定した。

この行為に対する認識度は表3のように、全体で“虐待行為と認識する”7名(4.7%)、“虐待行為と認識しない”106名(71.6%)、“分からない”35名(23.6%)であった。学年間での有意差は認められなかったが、“虐待行為と認識する”学生が、学年を上がるごとに減少しており、3年

表3 事例1 身体的虐待

	認識する	認識しない	分からない	計
1年生	6	38	18	62
2年生	1	53	10	64
3年生	0	15	7	22
計	7	106	35	148

生の回答者では認識するものが0名であった。

2) 世話の放任

事例2：利用者の食事介助をしている際に、利用者の衣類に食べこぼしが落ちてしまい衣類が汚れてしまったが、午後からすぐに入浴があるのでそのままの衣類で対応した。

表4 事例2 世話の放任

	認識する	認識しない	分からない	計
1年生	18	13	31	62
2年生	9	18	37	64
3年生	6	7	8	22
計	33	38	76	148

この行為に対する認識度は表4のように、全体で“虐待行為と認識する”33名(22.3%)、“虐待行為と認識しない”38名(25.7%)、“分からない”76名(51.4%)であった。学年間での有意差は認められなかった。“虐待行為と認識する”学生が3年生の回答者で多く、6名(27.3%)であった。

3) 心理的虐待

事例3：認知症で何度も繰り返し訴える利用者をいつものことだからと思い、スタッフが無視して会話をしなかった。

表5 事例3 心理的虐待

	認識する	認識しない	分からない	計
1年生	58	0	3	62
2年生	53	2	9	64
3年生	15	1	6	22
計	127	3	18	148

P<0.05
P<0.001

この行為に対する認識度は表5のように、全体で“虐待行為と認識する”127名(85.8%)、“虐待行為と認識しない”3名(2.0%)、“分からない”18名(12.2%)であった。学年間では分散分析でF=5.077, P=0.007と有意に差

があり、各学年間ではMann-Whitney検定により、1-2年生間で $P=0.03$ 、1-3年生間で $P=0.001$ であった。しかし、2-3年生間では、有意差は認められなかった。学年が上がるにつれて、“虐待行為と認識する”学生が減少し、“わからない”と回答する学生が増えていることがわかった。

4) 性的虐待

事例4：いつも女性スタッフで、女性の入浴介助を行っているが、今日は欠勤者が多くスタッフが少なかったので、男性のスタッフに手伝ってもらい、女性の利用者の入浴介助を行った。

表6 事例4 性的虐待

	認識する	認識しない	分からない	計
1年生	16	10	36	62
2年生	5	26	33	64
3年生	4	6	12	22
計	25	42	81	148

この行為に対する認識度は表6のように、全体で“虐待行為と認識する”25名(16.9%)、“虐待行為と認識しない”42名(28.4%)、“分からない”81名(54.7%)であった。学年間での有意差は認められなかった。“分からない”と回答した学生が、各学年ともに50%を超えていた。

5) 経済的虐待

事例5：認知症の利用者から、同意を得てスタッフが一時的に金銭を借りた。

表7 事例5 経済的虐待

	認識する	認識しない	分からない	計
1年生	53	0	9	62
2年生	33	1	29	64
3年生	8	4	10	22
計	94	5	48	148

この行為に対する認識度は表7のように、全体で“虐待行為と認識する”94名(63.5%)、“虐待行為と認識しない”5名(3.4%)、“分からない”48名(32.4%)であった。学年間では分散分析で $F=10.429$ 、 $P=0.000$ と有意に差があり、各学年間ではMann-Whitney検定により、1-2年生間、1-3年生間ともに $P=0.000$ であった。2-3年生間では、有意差は認められなかった。1年生に比較して、2・3年生では、“虐待行為と認識する”学生が減少し、“わからない”と回答する学生が増えていることがわかった。

6) 自己放任・自虐

事例6：利用者の髪の毛やひげが伸び放題になっているのを発見して、何度も声をかけたが、本人が拒否的で対応できなかった。

表8 事例6 自己放任・自虐

	認識する	認識しない	分からない	計
1年生	2	34	25	61
2年生	1	43	20	64
3年生	1	16	5	22
計	4	93	50	147

この行為に対する認識度は表8のように、全体で“虐待行為と認識する”4名(2.7%)、“虐待行為と認識しない”93名(62.8%)、“分からない”50名(33.8%)であった。学年間では分散分析で $F=38.096$ 、 $P=0.000$ と有意に差があり、各学年間ではMann-Whitney検定により、1-2年生間、1-3年生間ともに $P=0.000$ であった。2-3年生間では、有意差は認められなかった。1年生に比較して、2・3年生では、“虐待行為と認識しない”学生が増加し、“わからない”と回答する学生が減少していることがわかった。

V 考察

1. 虐待の種類による虐待認識

事例を作成し施設スタッフへの調査を実施した西元ら¹³⁾の調査(以降、西元調査とする)と比較すると、大きな相違は見られず、心理的虐待と経済的虐待が認識する率が高く、その他の虐待行為では20%程度の認識率であることはほぼ同様の結果であった。一方、大西¹⁴⁾の一般大学生と保健学専攻の学生への調査では、叱責、身体的暴力、無視、意図的放任については虐待行為として認識しているが、無意図的虐待や、経済的虐待に関する認識は十分ではないと述べている。今回の事例の提示は、明らかに暴力や暴言を高齢者に向けてといった誰にでもわかる虐待行為ではなく、高齢者施設の現場で日常的にみられる行為の中に潜む虐待行為であり、虐待への感受性が問われる内容の事例である。

事例1(身体的虐待)では、現場の中で日常的に実施されている抑制を虐待と捉える事の困難さを示している。車椅子の安全ベルトは安全の確保や介護事故の予防といった側面があり、“仕方がない”という現場の雰囲気がある。学年が上がるごとに認識度が減少していく結果も、現場での実習体験から“この程度はよく行われていることなので虐待とは言いにくい”と理解してしまっているのではないかと推測される。身体拘束は虐待であるという認識を持ち、安全確保への工夫や配慮を試みる看護職者の姿勢が重要になる。

事例2（世話の放任）では、衣類の汚れを放置するといったもので、“分からない”と回答した学生が半数を超えている。西元調査では、認識する26.0%、しない45.8%、分からない27.9%であり、認識しないとする回答が半数を占め、学生の回答との相違がみられた。この事例も日常的にはしばしば遭遇する場面であり、業務の流れを考えると“この程度は仕方がない”という認識になると思われる。学生は、汚れた衣服のままでいることへの違和感を感じながら、それが虐待につながるかどうかの判断を迷っている。その判断を明確にする方法として『第三者の目を意識する』（注*）ことを実習の中で徹底していくことが課題である。

事例3（心理的虐待）では、“認識する”と回答した学生は85.8%であり、他の事例と比較しても最も虐待の認識度が高かった。西元調査においても認識する72.4%という結果で、認知症高齢者へのコミュニケーションにおける虐待の認識は高いことがわかった。この事例は、認知症への理解と基本的な関わり方に関する具体的行為を示しており、学生の祖父母との関わりでも無視をしたり“うるさい”といった暴言を言うなどの虐待と認識した行為の振り返りが、この事例の虐待認識を高めたのではないかと推察する。

事例4（性的虐待）では、“分からない”が半数を占めた。西元調査では、認識しないが49.7%で、学生の認識との相違がみられた。異性ケア・異性介護について最近では課題とされることが多くなってきたが、事例のように女性高齢者の入浴介助を男性介護者が行うという場面も、男性介護士が増えてきた現場では珍しくない。職員の数や勤務の状況を考えてみると、このような入浴介助を虐待と考えるには厳しい現実がある。しかし、この場面を虐待になるかもしれないと考えてケアするのとそうでない場合は、ケアの方法や声のかけ方が変わってくるのではないかと。認識の有無でケアの質が変わると考えると、判断を迷いながら虐待にならないような対応を模索することがよりケアの質を確保できるのではないと思われる。

事例5（経済的虐待）では、“認識する”と回答した学生は60%を超え、虐待の認識度は高い。この事例は西元調査とはほぼ同様の結果であった。しかし、“分からない”と回答した者も多く、虐待というより犯罪やモラルの欠如といった意識でとらえた学生が多かったと思われる。この事例は、比較的容易に判断できるものと思われたが、“分からない”が30%を超えていることは、今後詳細に分析する必要が感じられた。

事例6（自虐）では、西元調査では認識する18.5%と低いものの、本調査では“認識する”学生はほとんどなく、セルフネグレクトへの理解が不足していることがわかった。高齢者虐待防止法では自己放任・自虐について定義は挙げられていないが、高崎¹⁵⁾と奥野¹⁶⁾の監修の看護

系のテキストでは記述されていた。しかし、学生に必要なテキストとして提示している中島ら監修¹⁷⁾のものを含めて参考資料でよく使用する4編¹⁸⁾ 19) 20)では、自己放任・自虐についての記述が見られなかった。学生への配布資料などを活用して虐待と見過ごしやすい行為についても十分に理解を深める対策が必要であると思われる。

2. 学年間の虐待認識の変化

学年間で、認識度に差がみられた事例は、③心理的虐待⑤経済的虐待⑥自虐の3事例であった。いずれも1年生の認識度が2・3年生より高いことが示された。1年次の調査時期が老年看護学の講義終了時であり、虐待の知識がまだ褪せていない時期であったことも影響していたと考えられるが、実習体験のない1年生の認識度が高いという結果は予想外であった。2・3年生のように、実習の中で多くの高齢者と関わり、高齢者や家族の思いを受けとめケアにつながる実践を体験してきた学生の方が、虐待認識度が高い結果になるという考えは、今回の結果では覆された。

西元調査においても、経験の長さが虐待への感受性を高めるわけではないことを指摘している。複数の学生が同一の虐待場面に立ち会っても、同じようなジレンマを感じることはまれである。キャロル・ギリガン²¹⁾は、人格や人の品性は、その行為を意識的に振り返り反復することで形成されると述べている。倫理的感受性は、行為の意味付けと内省的な省察によって育てられることが指導上の課題である。

3. 学生の虐待体験と虐待認識の関連

学生の生活体験の中での虐待については、“虐待に関する場面は行ったことも見たこともない”学生が約80%であった。約10%の虐待行為を経験した学生は、同居の祖父母への関わり方や、祖父母の入院時の目撃体験であった。高齢者の人権に関する講義後に自分自身の中高生時代の祖父母への言動を反省する感想もしばしば聞かれ、それらの言動が虐待になる危険性を理解した結果であろう。

桐野ら²²⁾は、介護家族の心理的虐待については、要介護高齢者に対する拒否感情と経済的逼迫感に有意な影響があり、特に、拒否感情は強い関連があると述べている。本学学生の高齢者イメージは、比較的肯定的なイメージを入学時から持っており、講義や実習を通してより強くなる傾向を筆者ら²³⁾の調査で明らかにしている。しかし、虐待行為体験学生の中には、否定的イメージを持っている場合もあり、その表出を促し、肯定的変化へと成長できる個別な関わり必要性が考えられる。

一方、実習中での虐待行為は全くなく、専門職者としての意識が明確に持っているものと思われる。“虐待に関

する場面は行ったことも見たこともない”が80%を超えて回答しており、現場のケア環境は質が高いことが推察される。しかし、ケアに関する目撃体験は少人数ではあるが見られた。これらの体験を仕方がないと現実受容してしまわず、課題として時期を逃さず議論できるような場の設定が重要になる。

4. 看護基礎教育における高齢者虐待教育の課題

今回の調査で用いた事例は、どのような施設や病院でも日常的に行われやすい虐待事例である。事例①②④では実習場面でも遭遇することが多く、現実的なケア環境への慣れや業務上のあきらめから、虐待行為であることの認識を抑制してしまっていることも考えられる。高齢者虐待に関する日常的なジレンマを放置していくと、不感状態へ陥る危険性が推測される。筆者ら²⁴⁾は実習体験の中で感じる看護ジレンマについての調査結果から、ジレンマを顕在化し解決していくことが、倫理的な感受性を育てることになることを指摘し、指導を行ってきたが、今回の調査では、高齢者虐待に関するジレンマは解決されていないことが推測された。

桂²⁵⁾の調査では、高齢者虐待に対して看護学生の83.1%が関心があるものの、身近な問題と考えている学生は38.5%と少ないことを指摘している。また、郷は医療施設の看護、病院の看護師の高齢者虐待に対する予防的役割に視点を当てた研究は見当たらない²⁶⁾と報告している。実際に、卒業生の多くは病院内での看護専門職として働くことを考えると、看護師が虐待者となる可能性を、自分自身の身近な問題として捉えることの重要性が示唆される。

虐待行為の定義を繰り返し理解し、専門職としての感受性を高め、「虐待不感」状態から「虐待予備軍」にならないために、日常的な場面を丁寧に分析し、意味づけすることの重要性が再認識された。

また、高齢者虐待防止法制定に貢献してきた日本老年看護学会や高崎²⁷⁾らの理念である「虐待を未然に防ぐための養護者の支援」という視点は、家族だけでなく施設や病院で高齢者に関わる専門職スタッフへの支援も教育の中で考えていくことが必要となろう。

VI 研究の限界と今後の課題

今回は横断的に各学年を調査したもので、対象が同一集団ではないことが限界である。今後は、実習指導上の課題を意識しながら、学生の虐待認識度と感受性の変化について縦断的に調査を繰り返し、教育効果を確認していきたい。

注*『第三者の目を意識する』

筆者の提案する老年看護学における倫理的な思考の一つ。高齢者ケアを行う際に、第三者の視線があることを意識しながら実践をすることで、倫理的な過ちを起こさず質のよいケアを提供できる。

第三者とは、自分自身の良心も含まれる。また、その対象となる高齢者をかけがえのないその人として大切に思う配偶者や家族、友人などの存在を意識することである。今、私（看護者）が行っているケアを、その第三者が見た時に、嬉しいケアなのだろうか、きちんとその意図が説明できるケアなのだろうかと内省し意識しながらケアを行うことである。それらの内省的実践の積み重ねが倫理的行為者としての看護者へと成長を促がすと考える。

引用文献

- 1) 上村紀子, 内藤和美, 岩崎衣世, 金内澄子, 佐藤麻里子, 若菜真琴: 高齢者虐待に関する研究動向. 群馬パース看護短期大学紀要, 4 (1), 45-59, 2002
- 2) 郷更織, 坂井さゆり: 高齢者虐待に関する看護研究・教育の動向と課題. 新潟大学医学部保健学科紀要, 8 (3), 111-126, 2007
- 3) 佐々木明子, 高崎絹子, 小野ミツ, 谷口好美, 水野敏子, 千葉由美, 桂晶子, 佐藤和佳子, 中村興睿, 古賀初子, 田代裕子, 渡辺アサ子, 山田達夫, 旭俊臣: 高齢者の虐待と支援に関する研究 (2). 保健婦雑誌, 53 (5), 383-391, 1997
- 4) 神山幸枝, 岸恵美子, 荒木美千子, 荒川真理子, 襲田祥恵, 工藤由紀, 松下由美子: 栃木県における在宅介護高齢者虐待に関する調査研究. 自治医科大学看護短期大学紀要, 7, 67-73, 1999
- 5) 中村恭子, 本川真弓: 老人虐待・事故を防ぐ地域看護の課題. 第34回日本看護学会-地域看護-, 76-78, 2003
- 6) 桐野匡史, 矢嶋裕樹, 柳漢守, 筒井孝子, 中嶋和夫: 在宅要介護高齢者の主介護者における介護負担感と心理的虐待の関連性. 厚生学の指標, 52 (3), 1-8, 2005
- 7) 伊藤薫: 在宅高齢者虐待通報に関する要因の研究. 三重県立看護大学紀要, 11, 73-80, 2007
- 8) 大西小百合, 飯降聖子, 依志江, 福岡和美: 高齢者虐待に関する意識調査. 京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要, 11 (1), 65-70, 2001
- 9) 桂晶子: 高齢者虐待に対する大学生の意識. 第38回日本看護学会論文集-地域看護-, 170-172, 2008
- 10) 古城幸子, 木下香織, 馬本智恵: 老年看護学実習での学生の看護ジレンマ. 新見公立短期大学紀要, 25, 63-71, 2004
- 11) 西元幸雄, 小林好弘, 紀平雅司他: 高齢者施設にお

- ける虐待の構造分析.老年社会科学, 28 (4) 522-537, 2007
- 12) 厚生労働省「高齢者虐待の防止, 高齢者の養護者に対する支援に関する法律」
- 13) 前掲書11) と同様
- 14) 前掲書 8) と同様
- 15) 高崎絹子, 水谷信子, 水野敏子, 高山成子編: 最新老年看護学.日本看護協会出版会, 60-67, 2006
- 16) 奥野茂子, 大西和子編週: 老年看護学 I.NOUVELLE HIROKAWA, 116-124, 2006
- 17) 堀内ふき編著: 高齢者の健康と障害.MCメディカ出版, 15-17, 2005
- 18) 中島紀恵子編著, 系統看護学講座専門20 老年看護学.医学書院, 53-56, 2005
- 19) 鎌田ケイ子, 河原礼子: 老年看護概論・老年保健.メヂカルフレンド社, 143-150, 2006
- 20) 田中マキ子編著: 老年看護学.医学芸術者, 104-106, 2006
- 21) サラ・T・フライ著, 片田範子・山本あい子訳: 看護実践の倫理.日本看護協会出版会, 1998
- 22) 前掲書 6) と同様
- 23) 前掲書10) と同様
- 24) 古城幸子, 木下香織: 老年看護学の授業による学生の高齢者イメージの変化.新見公立短期大学紀要, 23, 53-60, 2002
- 25) 前掲書 9) と同様
- 26) 前掲書 2) と同様
- 27) 高崎絹子: 高齢者虐待防止法に関する法制度の整備の現状と課題.老年看護学, 10 (1), 163-165, 2005

**Nursing Students's Cognition of Elderly Abuse
- A cross-sectional survey of cognitive level using paper patients -**

Sachiko KOJO¹⁾, Kaori KINOSHITA¹⁾, Tomoe UMAMOTO¹⁾

¹⁾Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

On cognitive level of elderly abuse, we made a survey of nursing students from the first year through the third year. The options were "I recognize", "I don't recognize" and "I don't know". The case examples were 1)physical abuse, 2)neglect of care, 3)mental abuse, 4)sexual abuse, 5)financial exploitation and 6)self-abuse. The result showed that the cognitive levels of mental abuse and financial abuse were high and that the other levels were low. Also, it revealed the significant difference that upperclass students showed lower levels than the first year students.

Preventing and early detecting elderly abuse requires nurses' basic attitude in which an expert is sensitive to the ethical issues such as respect for human rights of the elderly and confronts a moral dilemma. However, the upper the students became, the more they hesitated over judging abuse cases and the less sensitive they became to abuse. This survey clarified the future issues that attaching the significance of practical training should be done more carefully and the conditions of practical training should be adjusted more properly.

Key words: elderly abuse, cognitive level, nursing student